米欧亜回覧

第５３号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集
広報メディア委員会

新年懇親例会は「スウェーデン」をテーマに
駐日大使ご夫妻も臨席、華やかに新春を寿ぐ

新年懇親例会は、一月一六日(金)夕、日本プレスセンターの十階、夜景の素晴らしいレストラン・アラスカで開催される。本会では、毎年、岩倉使節団が訪れた国々をテーマに駐日大使や公使をお招きしているが、本年はスウェーデンをテーマに行うことになり、ノレイン大使ご夫妻が臨席される。また、大使館付きのシェフによる特別料理も用意され、メゾソプラノ歌手とピアニストの演奏も入り華やかさを添える。

また、元駐スウェーデン大使だった＊＊夫妻もご出席の予定であり、スウェーデン社会研究所の須永昌博氏をはじめそのメンバーも多数参加の予定である。

スウェーデンは小国ながら、現在世界で高福祉、高所得、永世中立、ノーベル賞の国などとして、もっとも評価の高い国であり、学ぶべき点も多い。われわれ市民レベルでもいよいよ親交を深めていきたい国である。会員各位の多数の参加を期待している。

ストックホルムの全景
（『実記』より）

知合い、友人を一人でも、催事に誘おう！

現在、当会の最大の課題は、会員の高齢化であり、より若い世代の会員の拡大である。ついては全体例会はむろん、各部会に一人でも多くの人を誘い、会員になってもらう運動をすすめたい。ついては、その手始めとしてまず新年懇親例会に会員一人一人がなるべく参加し、また積極的に新しい人を勧誘してもらうことが肝要である。その意味で、一月十六日には必ず一人は誘うことを心がけてほしい。

十月全体例会
環境をテーマに熱心な討議

十月十八日、日本プレスセンター会議室で、現未来部会担当の十月全体例会が開催された。

現状報告と各部会報告の一部に続き、国立環境研究所参与の西岡秀三氏の講演「低炭素社会をどう築くか」があった。熱心な質疑を通して環境に対する関心の高さが感じられた。

（詳細は二・三頁）

それにしても、この会の魅力は何だろう?とあらためて考えてみると、異口同音に伝わってくるのは次の言葉である。「こんなに素晴らしい、魅力のある人が集まっている会はない」、「いろいろの部会があり、いろいろの興味でつながっている」、そして「そこで知り合いになれる。それはむろんビジネスに役立つこともあるし、趣味がひろがることもある」。そして、「一番の魅力は知り合いが増えることでより人生が豊かになること」でしょうか。

予定時間を過ぎても質疑が続いた
（10月18日・全体例会）

新時代の幕開け、オバマ大統領の誕生

泉　三郎

岩倉使節団がワシントンを訪れた一八七二年、黒人はどんな状況にあったのか。久米邦武は『実記』で南北戦争によってはじめて黒人が人権を認められたが、なお白黒の差別は厳しく、黒人は一般に教育もなく愚民扱いされていることを指摘している。

「黒奴始メテ人間ニ出タレトモ、交際モナク、丁字モナキ愚民ナレハ、白人ハ共ニ歯スルヲセス、猶白黒ノ淫渭ハ判然ナリ」である。そしてこう続く・・・

「但し、中ニハ早ク自主セル黒人モアリ、現ニ下院ニ選挙サレタル人傑モアリ、又巨万ヲ累ネタル豪姓モアリ、皮膚ノ色ハ知識ニ管係ナキコトモ亦明ケシ、故ニ有志ノ人、教育ニ力ヲ尽シ、因テ学校ノ設ケアル所ナリ、顧フニ十余年ノ星霜ヲ経ハ、黒人ニテモ英才輩出シ、白人ノ不学ナルモノハ、役ヲ取ル至ラン」

久米の慧眼はその本質を衝いている。

以来、百三十数年、遂にハーフとはいえ黒人出身のバラク・オバマが、アメリカ合衆国大統領に選出されたのだ。まさに歴史的な事件と言っていい。そしてこのことは三つの点で刮目に値すると思う。一つはそのキャッチコピーである。Change、We can, You can, Yes we can.である。わかりやすく、相手を巻きこむ力がある。二つにはインターネットの活用である。それは一九六〇年におけるケネデイの勝利がテレビの活用に依ったことでもあり相通じるもので、草の根民主主義の新しいあり方を示したものといえるからだ。そして三つ目はオバマが尊敬する人物としてキング牧師と並びマハトマ・ガンジーを挙げていることだ。それがアジア的な平和思想を理解することとすれば、そのグローバルな広がりは地球を救う可能性がある。これまでの白人大統領にはなかったことである。よき社会への一歩がオバマの出現で着実にすすむことを切に期待したい。

第49回 全体例会

十月十八日全体例会　西岡秀三氏熱演

地球温暖化への挑戦」

十月の全体例会は十月十八日（土）日本プレスセンター会議室において開催された。出席者は二十二名。講演に先立ち行われた各部会報告会では、冒頭、泉理事長より①今年度は、事務局の充実と会員拡大を目的に特別賛助金をお願いしたところ現在までに二百十五万円のご協力を頂戴しました。改めて御礼申し上げます。各位のご厚意・ご支援を生かし、成果を挙げてまいりたいと思います。②具体的内容としては、事務局の充実（各種連絡事務円滑化他）、新しい部会の設置（藤田、中山両氏を中心に広報メディア委員会を立ち上げ、会員拡大策を検討・実施中）、既存の部会の拡充（DVDの会、グローバルジャパンの会）などであります。との現状報告を兼ねた挨拶があった。また、水澤周氏をしのぶ会（九月十九日、国際文化会館、三十八名参加）の報告も行われた。引き続き各部会報告が行われ、実記を読む会（桑名）、英文実記を読む会（小林）、歴史部会（藤原）、現未来部会（小田）、メディア部会（中山）各氏から現況と今後の活動について簡潔な報告があった。また、総務部会において企画中の新年懇親例会（日時：来年一月十六日金曜日、十八時開会、内容：テーマ国スウェーデン、大使他出席、ピアノ演奏他）について近藤氏より説明があった。なお、講演終了後、新橋亭別館において懇親会が開催され十一名の会員が講師を囲み歓談した。

（文責）山田　哲司

全体例会講師の西岡秀三氏

▲講演要旨▼

現未来部会の塚本代表幹事から今年の部会の大きなテーマの一つである温暖化問題について、日本を代表する研究家である国立環境研究所参与の西岡秀三氏に全体例会での講演をお願いした。

IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の評価報告書の作成には日本代表として大きな役割を果たされるなど、この問題についての研究と共に啓蒙活動にも精力的に活躍される西岡氏の講演は、多くの図表を使ってユーモアある口調で、参加者全員を魅了した。温暖化問題の重大さを認識し、一刻も早く政府、企業、市民が協調して対応策を取るべきであると呼びかけられた。

最初に、地球温暖化の現状をデータに基づいて解説。地球の平均気温はこの百年間で〇・七四度も上昇しているが、最近の五十年は上昇速度が二倍に加速している。二十世紀後半の北半球の平均気温は過去千三百年間で最も高く、一八五〇年以降の気温の高かった十二年の殆どが最近のことである。さまざまな観測データや現象から、地球温暖化が進んでいることには疑う余地がないとIPCCは判断している。この急速な温暖化は自然要因だけでは説明できず、人間の活動による温室ガスの増加が主な原因と考えざるを得ない。

急速な温暖化によって、吾々を取り巻く生態系に恐るべき変化が起きている。台風やハリケーンが大型化し、洪水も激しくなっている。それでいて砂漠地域では乾燥が続いている。食料生産の面でも栽培時期、収穫量、品質などで影響が出始めている。多くの発展途上国では食料生産に支障が発生したり、水資源の不足に悩むところが出てくる。海水の温暖化ガス吸収力もかなり減退する可能性が高い。安定した気候こそ人々の幸せな営みの基礎である。地球温暖化は何としても喰い止めなければならない。

しかも、この気温上昇はすでに傾向化していて、今すぐに対応策を講じても二〇三〇年までは十年あたり〇・二度の上昇が続くことは避けられない。化石燃料に依存する経済発展を続けることは、地球環境保全とは両立しない。一刻も早く温暖化抑制に断固として取り組まなくてはならない。

二〇五〇年における世界の二酸化炭素の排出量を一九九〇年に対して三十～六十％削減する必要があると考えられるが、先進国はそれ以上の削減を迫られている。これに関連して、国立環境研究所が京都大学等と協力して多くの分野の研究者の協力を得て作成した「日本低炭素化社会のシナリオ：温室ガス七十％削減可能性検討」についての報告書を紹介された。これは、日本で二〇五〇年に二酸化炭素を一九九〇年に比べて七十％削減するような低炭素化社会が実現可能であるかどうかを検討したものである。ここでバックキャスティングという工夫をこらしている。予測フォーキャスティングではなく、将来の目標を設定してそれを達成することは技術的・政策的に可能かどうかを検討する手法を使った。五十年間と言う長い期間には社会も大きく変化する。そこで、日本経済が二〇五〇年に向けて進む方向について、幅を持った将来像を複数のシナリオで設定する。ある程度の成長を伴う活力のある社会を前提として、「活発志向」と「ゆとり志向」の二つのシナリオを描写する。これに対応したエネルギー・サービス需要を推定し、エネルギー需給の構造と利用可能な技術を同定し、排出される二酸化炭素の量を計算して、最後にエネ

安曇野の田園風景
（上映されたスライドの表紙）

ルギー供給可能性をチェックする方法で目標達成の可能性を詳細に検討した。利用可能な技術としては、水素自動車などの革新的な進歩は考慮にいれるが、核融合などの不確実な技術は想定にいれない。いずれのシナリオでも、その気になって経済構造を変革し、技術開発とその利用を促進するならば、七十％削減は可能である。エネルギー需要の四十～四十五％削減と、エネルギー供給の低炭素化によって可能となる。この削減に要する直接コストは、想定される二〇五〇年のＧＤＰのおおよそ一％と推定される。

イギリス、ドイツ、フランスなどは、かなり前から二〇五〇年には七十～八十％減という厳しい目標を政府が提示し、民間もその方向に動いている。その点では、日本はおおいに遅れている。

国民の活力を保ちながら、産業構造を転換し、技術革新によって低炭素社会の実現は可能である。しかも、早期の対策が効果的であり、また経済的である。これを実現する為には、低炭素社会の必然性への認識を国民全体が共有し、政府が明確な方向を示し、削減計画を策定する必要がある。これによって、技術イノベーションを推進し、国際競争力を高める戦略が出てくる。低炭素社会への一刻も早い踏み出しを、熱く訴える内容の充実した講演であった。

岩倉使節団の米欧回覧などを基点にして、明治日本は欧米をモデルに近代化を一気に達成した。今度は、日本が温暖化対策で政策的にも技術的にも模範国となって、アジアのみならず世界の発展途上国がリープフロッグで追いつくモデルになることを期待したい、との提言で結ばれ大きな拍手を受けた。

（文責）西井正臣

水沢周氏を偲ぶ会

「水沢周氏を偲ぶ会」は、有志の主催で、九月十九日(金)午後六時より、国際文化会館で行われた。祭壇には水沢氏の「米欧回覧実記」現代語訳出版祝賀会でのにこやかな写真が飾られ、併せて堂々たる現代語訳五巻本と軽快な簡易版五巻本が飾られた。そして桑名正行氏の軽快な司会の下、代表としての泉三郎氏の挨拶があり、長らく「読む会」の幹事役だった多田幸子さんの発声で献杯をおこなった。

読む会を代表し、
多田さんの発生で献杯

そして旧友の林茂雄さんからの思い出話を皮切りに参加者全員三十八名から故人を偲ぶ発言があった。まだまだ書きたいテーマをお持ちだったようだが、「米欧回覧実記」全五巻の現代語訳という最後の大事業を完成され、十分満足しておられたのではないかとの思いが多くの参加者から語られた。そこには自ずから水沢さんへの敬愛の念とその多面的な業績や相貌が浮き彫りになり、まことにこころのこもった偲ぶ会になった。こころから水沢さんのご冥福をお祈りしたい。

祭壇に思いを込めて献花
（写真 橋本吉信）

水沢周先生からの宿題に応える

三原 浩

久米邦武の米欧回覧実記第五編には、岩倉使節団が上海から長崎に到着する前後の（九月）五日が二度（三百三十五頁と三百三十六頁）出て来ることから、水沢先生は現代語訳（第五巻三百七十九－三百八十一頁）の訳者注で、当時の船の速度から考えて「六日朝八時」に長崎に着く事は不可能、一日ずらして「七日朝八時」に着いたとすると横浜着が十三日ではなく十四日になってしまうということで、上海出帆が五日ではなく四日朝だったのではないかという推理をしておられます。理路整然たる推理で、「米欧亜回覧ニュース」第五十号「アヴァ号の事など」に記したように、私もその通りだろうと思っていました。先生はその注の最後に「以上、長々と述べて来たような考え方以外の解決策があったら、是非お聞かせ願いたいと思う」と記しておられ、先生からの宿題として、気になっておりました。

たまたま「アヴァ号の事など」で提起した私の二つの疑問点、使節団が横浜に帰着した時の船の正確な船名（実記では「ゴルテンエン」となっている）および大使と共に帰国した約十五名と言われている一行の名前について、どこからも情報が入ってきませんでしたので、やむを得ず国会図書館に通い、当時の英字新聞、一八七三年九月二十日付けTHE JAPAN WEEKLY MAILに「Golden Age」号からの下記航海レポートが掲載されているのを見つけました。

上海発九月五日、9.33 a.m.
長崎着九月七日、7.47 a.m.
長崎発九月八日、0.45 a.m.
兵庫着九月九日、5.34 a.m.
兵庫発九月十一日、5.05 p.m.
横浜着九月十三日、8.40 a.m.

実は「七日朝八時」長崎着ではないかという水沢先生の推理の前半は上記のとおり正解でした。久米の実記三百三十六頁の二度目の五日は六日（終日航海）の間違い、続く六日、七日、八日はそれぞれ七日（長崎着）、八日（唐津、関門海峡、周防沖）、九日（芸備海峡）の間違いである事が判明しました。九日（午後神戸上陸）以降は『実記』のとおりで間違いありません。

水沢先生がお元気な内に、このご報告が出来れば喜んで頂けたのにと悔やまれてなりません。このレポートを霊前に献じ、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

書評

泉三郎著 誇り高き日本人―国の命運を背負った岩倉使節団の物語」を読んで…

政治家、官僚必読の書

永富 邦雄

泉三郎氏の長年に亘る研究の集大成ともいえる労作「誇り高き日本人」は正に誇り高き名著である。

著者は既に「明治四年のアンバッサドル」をはじめ多数の著書を出版されているが、本書はそれらを総括された新たな視点での岩倉使節団のコンメンタール（kommentar）編と解されよう。

下敷きである「米欧回覧実記」の中から日本の近現代史研究の上、又今後のわが国のあり方を考える上からも必要と思われるテーマを取捨選択し、且つ登場人物がどんな視点で観察し何を学び取ろうと考えたか、そして帰国後彼らがどの様な行動を取ったかを鋭く検証している。最近若者の間での流行り言葉で、その場の空気の読めない人のことを「KY」というのだそうであるが、著者はその逆。一行が訪問した先を何十年か掛けて実地見聞されただけの事があってか、まるで使節団に同行取材をしているように、その場の雰囲気が正確に映し出されていると感じたのは私だけではないと思う。

先日福田前総理が突然職を投げ出し、最後の記者会見で「私は貴方と違って自分を客観的に見る力を持っているんだ」と気色ばんだが、全く呆れた話で、政治家たるもの、ましてや一国の宰相は自分の事より自分の国を客観的に観察出来なければならないはず。この点本書を読んで行間からも、岩倉使節団の主要メンバーは皆それぞれに日本の将来を真剣に考えての視察旅行をしていると感じた次第である。日本の政治家、並びに官僚の諸兄姉は必読の一冊ではなかろうか。

誇り高き日本人」の風景

西井 正臣

この本を読むと、実に爽快になる。岩倉使節団そのものが壮挙であるが、これを三十年に亘ってずっと追い続けてこられた泉三郎氏の熱意も凄い。両者に流れる高い志に敬服する。

使節団の紹介と云うことでは、十五年前に出された「米欧回覧―百二十年の旅」によって『実記』の記録に基づいた訪問先の詳細な記述は完成したといえよう。その後の「堂々たる日本人」等の著作は、その普及版であった、と私は思う。

この最近作は、形式的には使節団の紹介という点でこれまでの本と同じであるが、実体は明治建国の偉人たちの人物・志を描くことによって、行き詰った今の日本を改革しなければいけないという著者の強い危機感と、その解決に立つべき姿勢を訴えているのではないか。『実記』のDVD版作成にあたって使節団の登場人物の研究を深められた成果が随所に見られ、伝記文学の傑作である。しかし、著者の本意は伝記ではなく、改革に必要な誇りと志の風景を提示することに尽きるのではないか。

文体はますます流麗かつ自在で、読む者を飽きさせることはないが、よほど注意しないと、著者の日本のあり方に対する深い憂慮を背景にして描写された先人たちの高い志が読み過ごされる懸念がある。

来るべき総選挙にあたって、すべての候補者がこの本を読んで、日本改革の志を述べて貰いたい。誇り高き日本人が、近代西欧文明の混迷に対して新しい方向を打ち出す光景を見たい。これが実現すれば、何と愉快だろう。

長旅で苦楽を共にした同志的結束…

小林 養丈

『実記』は大著であり、漢文調で書かれた原典を一気に読み通すのは大仕事である。本書では、久米のこの紀行記が軽快な語り口で要約され、百数十年前の世界一周の旅に読者を容易に誘ってくれる。同時にこの本には使節団に直接、間接関係した個性的な人物が数多く登場して展開するエピソードが物語風に紹介され旅を彩っている。このため本書は単なる紀行記録でなく人間物語として興味深く、読者を最後まであきさせない。

米欧回覧によってどういう成果があったかは、エピローグの章が応えてくれる。ここには大使、副使、久米など主だった人たちの後日談も要約されている。ここで思うことは、この旅の一番の収穫は、一年十ヶ月余の長旅で苦楽をともにした人たちの同志的な結束であったかも知れぬということだ。新政府内にあって、欧米回覧組は政治的立場が違っても西欧について共通認識を持ち、誇り高き指導者を目指しながら、漸進的な維新改革の総仕上げに貢献したと思う。

歴史書は数多くあるが、岩倉使節団の成果という観点からの議論をするには、更に別な一冊を必要とするかも知れない。また使節団のその後の人間物語も興味深いものがあろう。本書を読んで更に深く知りたくなった。またの機会を著者に期待したい。

ブログの寸評から

✤首相官邸に 誇り高き日本人」を大量に送りつけてやりましょうか

（株）コンパスの代表、鈴木進介氏はブログにこう書く。

「気概をもって国を引っ張る、そんなリーダシップを一人でも多くの人がみつけていかなくてはなりません。誇り高さはあるのか？気概はあるのか？政府、企業を問わず、リーダーには再度問いかけたいですね。もちろん、自分に対しても…」

✤こんな重要なことがらが…不思議？？？

「タカさんの読書日記」というブログにはこうある。

「歴史の中に埋もれてしまいそうなこの岩倉使節団が、いかに日本のそれからの運命において意味のあるものであったかを本書で初めて知った。こんな重要なことがらが何故さほど重要視されていないのかということも却って不思議な気がしないではない」

現代語訳・米欧回覧実記・普及版」

百人百様に面白い、売れ行きも好調！

「米欧回覧実記」はまさにエンサイクロペディア的な書物、それだけに百人百様の面白さがあり、読み方ができる。その一端は次の書評にも如実に表れている。

インスパイアの成毛真氏は、産経新聞の書評欄でこう書いている。久米は米国で、「ビンをフランスからわざわざ輸入している理由は、ワインはフランスの名産であって、ボトルにせよ荷姿にせよフランスの名を借りないと市場で流通しないから」としている。成毛氏は久米らが既にブランドの重要性に気づいていることに驚き、それをとても面白がっている。

また、競馬史料館の館長である井崎脩五郎氏は、「ありやりや、岩倉使節団はアメリカで競馬場にも行っていたのか、これは嬉しいなあ」と久米がサンフランシスコの競馬場を訪れた一八七二年一月二十六日の記事を紹介して次のように書いている。

「この日の午後二時五〇分から、アグリカルチュラル・ガーデンにおいて競馬が開催され、使節団が招かれた。この公園は市の南部にあり、あたりは白い砂の荒れ地である。そこを整地して競馬場とし、その馬場開きに使節団を招待したのである」。そして、女性も馬好きだとか馬券や賭のことも書いてあって、馬ファンにもたしかに面白いのだ…

さて、本の売れ行きだが、なかなか好調で、慶応大学出版会の話では、着実に売り上げを伸ばしているという。一巻のアメリカ編がトップで二巻の英国編がそれに続き、共に二千部に迫り、三巻、四巻、五巻も軒並み千五百部を超えてきている。ますますギャロップしてロングセラーになることを期待したい。

グローバルジャパン研究会

◇第六回研究会

九月二十日にブレスセンターで行われた。報告者は、（社）スコーレ協会会長の永池榮吉氏。テーマは「世界に発信する日本文明の課題」。

永池氏は、サミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」から説起し、新たな日本文明の有り方を論じた。現代、世界をリードしているのは西洋文明であり、それに拮抗して台頭するイスラム文明と中国文明、そして日本文明という構図を説明。その中で日本文明の注目すべき点は、二〇〇〇年の歴史の中で美しい揺らぎと安定を育んできたことであり、江戸のライフスタイル、自然循環型社会、一元性と二項対立を超える思想である。そして、「それこそが日本文明を世界に発信する際のコアなる思想であろう」と提言。

◇第七回研究会

十月六日、国際文化会館で行われた。報告者はギャラリー「無境」の主人、塚田晴可氏で、テーマは「日本美術から世界への発信」。

塚田氏は、美術商として長年にわたり日本文化に接してきた立場から、「日本人は自らの国の美術の真の価値を知らず自信を失っている」由々しき現状を指摘。かつて岡倉天心は「茶の本」を通じて世界に日本文化の素晴らしさを発信したが、その継承者は未だ現れず、短期的経済優先の考え方に支配されている。我々日本人はもう一度原点に返って、日本の文化や美術の良さを見直し、その素晴らしさを世界に伝えることによって経済優先、効率重視の潮流を変えることができるのではないだろうか、と提案。

◇第八回研究会

十一月二十一日、国際文化会館で行われた。今回は、第一回から第七回までのレジュメおよび質疑応答の資料が配られ、参加者全員で現代日本の直面する問題について自由な意見交換が行われた。

時局柄、オバマ大統領の誕生と麻生総理の二兆円問題。金、金、金の短期経済的な価値観が優先するアメリカからの脱皮に期待をかける姿勢と日本の再生を模索する意見が飛び交った。「モラルリーダーの国となるべき」「豊かで徳のある国を目指すべき」という提案や、グローバル・ハートとグローバル・テクノロジーを表わす「球魂球才の国を目指すべき」など日本の将来像にも焦点が当てられ、グローバルジャパン研究会にふさわしい、多くの示唆に富んだ内容だった。

（文責）小松 優香

DVD 岩倉使節団の米欧回覧」を見て・聞いて・語る会

大阪で三回シリーズ開催

関西支部では、泉三郎氏を招いて第一回（横浜出帆からアメリカ回覧）を十一月二十二日、弥生会館で開催した。参加者は二十六名（内会員は八名）。

参加者からは次のような感想があった。

百数十年前に日本人がこんな旅をしていたとは知らなかった、歴史の面白さを感じた、日本の近代史に興味をもった、動画でなく静止画であるのがかえって新鮮だった、またナレーションが講師自身によるものであり、リアリティが感じられた、などなど。そのあと会場を模様替えして、本来「酒宴」の意味もあるという「シンポジウム」の名にふさわしく、ビールなど飲みながらのリラックスした懇談形式に移った。

そこではNHK「篤姫」も話題になり、岩倉具視についてのネガティブなイメージも語られ、泉三郎氏からは「篤姫」はフィクションが多く、史実に忠実でない点があり、人物の評価についてはよほど注意が必要だとの指摘もあった。また、このDVDの制作にあたっての苦心談を聞きたいとの声には、シナリオに合う映像を探すことやいい映像があってもシナリオに合わないとか、ナレーションの吹き込みの難しさとか、作者ならではの話もあって興味をひいた。

歴史として見ることでそこから教訓を得ることと同時に、当初の評価に対して時を経ることで異なる視点からの評価ができることが大切であり喜びでもあると思った。

次回は、一月二十四日（土）十三時三十分～、大阪弥生会館、英国編とフランス編の予定、どうぞ参加ください。

（文責）難波 康熙

実記を読む会報告

連絡　桑名 正行
Tel&Fax 03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

■第百二十一回

九月十一日開催、出席者十一名、見学者二名。

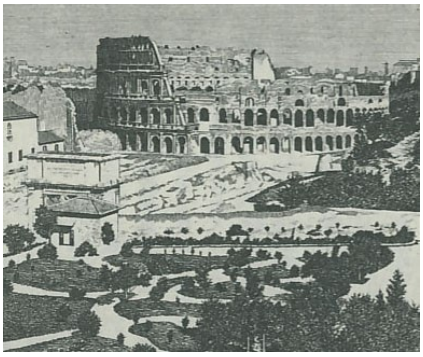
今回は十一月二十六日「高田ゼミ」（研究集会）の打ち合わせを行った。当日の課題提出、所見発表は鵜飼、小林（冨）、堀江、三氏にお願いする事に決まった。

話題①鵜飼さんが『実記を片手にサンフランシスコ』―「Ralston Hall訪問記、その他」をGPS地図等を使って説明。この詳細は、九月十二日付「回覧の会広報メール」に添付。

話題②三原さんが『由良守応と岩倉使節団』について報告された。岩倉使節団がワシントン、ロンドン、パリと巡業。その各地で由良守応が木戸、大久保など大物と会っており、『木戸日記』、『大久保日記』にも由良の名前が書き込まれていること、特に大久保、由良ともに一八七三年五月二十六日、同じ日に横浜に帰着した―こうした事実から，由良の地元（和歌山・由良郡）の人々は、テッキリ由良が岩倉使節団の一員と思い込んでいる様子という。三原さんの入念な調査によると、由良は同じ頃、外債調達を目的に米・欧に派遣された『吉田清成グループ』の関連とも推察され、奇しくも別船で同日横浜着であることが突き止められた、と。

明治創世記の『吉田清成グループ』とか、高崎清風をチーフとした『左院視察団』など、複数の米・欧派遣機動隊の活躍ぶりを調べてみたい、そんな一例である。

（文責）桑名正行



ローマのコロッセウム（『実記』）

■第百二十二回

十月九日開催、出席者十二名。

第七十五巻『ローマ市の記・上』、岩倉使節団一行の列車は、西暦前から盛衰を重ねてきたローマへと進んだ。

ローマ市内では、サン・ピエトロ聖堂をはじめ、古代橋梁、パンテオン、フォルム、コロッセオなどを半日かけて見て回っている事が分かる。地図上でこれらの施設配置やルートをプロットし、さらに一行が視察したローマ市第一日目午後半日の行程を時間的に追ってみると、日本人高官を乗せた馬車が市内を疾走し、主要箇所で馬車乗降を繰り返しながら説明を聴取し、内部を参観し、メモを取るなどで、大変な過密スケジュールであった事が分かる。

本篇では、一度衰退した国は二度と立ち上がる事が困難な事をギリシャに例を取り、イタリアで痛感し、又法王が作った神聖ローマ帝国がその後双方の争いとなっていった事にも言及している。

明治から昭和に至る日本の歩みと現在から将来展望を重ね合わせると、日本の衰退が懸念され、苦しいが興味深いものがある。

（文責）堀江　興

■第百二十三回

十一月十三日開催。

第八十五巻『瑞士蘭山水ノ記』、スイス政府は一行を山岳地帯の観光に案内する。

ルツェルンでセレソール大統領他、政府要人と合流する。この日、フィッツナー・リギ鉄道(VRB)がリギ・クルムまで開通した落成祝賀会が開催され、使節団も同席する。山頂からの豪快な景色に恍惚とした久米の美文を期待したが、意外に少ない。天候のせいか、またはさすがの久米も言葉を失ったのか。

六月末から、友人夫婦とスイスに行った。私の第一目的は使節団の足跡を辿ってのリギ山行き。旅行の下調べをしている最中に一つの疑問にぶつかった。出版されている海外旅行ガイドブックや紀行文、鉄道関連専門紙、旅行社のパンフレットなど片端から調べたが、リギ山に関する解説の中で、使節団が参列した祝賀会に触れたものは全く見当たらない。

ルツェルンからリギ山頂へは使節団と同じルートをとった。まる一日を費やしたが、百三十五年前と同じ景色を見たという自己満足だけで終わった。

翌日、ルツェルン歴史博物館、図書館、フィッツナウ郷土博物館などを回ったが、具体的成果はなし。しかし、これがきっかけとなって、帰国後、それらの責任者の人たちから貴重な資料が送られてきた。一つは歴史博物館から送られてきたリギクルム・ホテルの宿泊者名簿。もう一つはルツェルン中央図書館の館長が見つけてくれた当時の新聞記事。特に大統領主催の晩餐会での一行の服装に関する部分が興味深い。

（文責）鵜飼直哉

英訳実記を読む会報告

連絡　岩崎洋三
Tel &Fax 03-3488-0532
y-iwasaki@isr.or.jp

■第六十三回

九月十八日開催、出席者八名。

Ch. 41 General Survey of France、報告者は永島氏。

第二巻英国編読了までに五年半を要したことから、毎回一人の報告者が一Chapterをこなす方法でペースアップを図ることになった。音読に一時間以上要することが判明したため、出席者が輪番でシェアすることにした。今回飛び入り参加の同時通訳の権威国弘正雄さんにも分担いただけたのは光栄だった。

今回の範囲はフランスの歴史、地理、産業等を概観する部分とて数字が多く出て来たが、久米の間違いに加えて、英訳段階の間違いもあって、混乱が少なくなかった。

■第六十四回

十月二十三日開催、出席者四名。

Ch. 42 Record of Paris pp. 27-49、報告者は小林氏。

今日はイギリスからドーバー海峡を渡ってフランスに入り、パリに到着する二十二頁の長丁場だったが、報告者の巧みなリードのお陰で要領

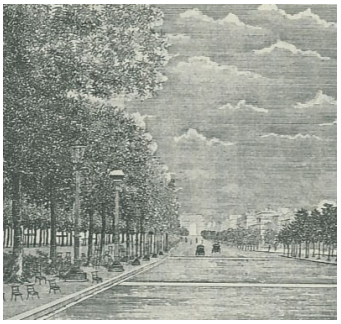
よく読み切ることが出来た。

方向音痴の久米には、道路が放射状に走るパリにはお手上げだった様で、英訳による東西南北の修正が数多くあった。我々はパリに在住経験のある永島氏のヴィヴィッドな説明のおかげで、要領よくパリ「観光」が出来た。

相変わらず、久米が漢籍から引用した凝った美的表現に英訳者が惑わされることが多く、小林氏は不適切な翻訳を二十箇所も指摘した。例えば、高所から見下ろした光景「米ヲ聚メルカ如シ」をsheaves of rice gathered in at harvest timeと、「米粒」を「束」と誤訳したり、意味を吟味せずに訳したところが散見されたのは残念だった。

恒例の打ち上げは、屋内満席のため軒下のテーブルであったが、アルコールが入るにつれて環状四号線がいつの間にかシャンゼリゼーに見えて来て、パリを語るには格好のしつらえになった。

（文責）岩崎洋三



シャンゼリゼ大通り
（『実記』）

歴史部会報告

連絡　小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■第四回・読書会

「日清・日露戦争」（原田敬一著）、九月二十二日開催、出席者二十五名。リポーターは大森東亜氏。

日清・日露戦争がアジアと日本の国家、社会にいかに大きな変化をもたらしたか、世界とアジアの中で考えるという課題設定の下で書かれた。まず日清戦争に至る政治社会の動向を辿り、戦争の実相を宣戦布告前の前哨戦から戦争経過を丹念に追い、旅順攻略時の市民虐殺事件、台湾征服戦争での匪賊虐殺にも言及した後、日清戦争が清国軍事力の弱体ぶりを世界に暴露し、以降西欧列強のアジアへの侵略を再始動させたとする。日本は台湾を武力で植民地化し大日本帝国としてアジアに登場し、他の西欧列強と連動して朝鮮、中国への侵略を拡大していく路線が敷かれたことを明らかにする。

この日清戦争が長年懸案の条約改正が成ると同時にアジアに覇権を求めることになったのは極めて皮肉といえよう。日本側戦死者一万三千余名、負傷者二十八万五千余名。清国は統計不明であるが、日本を上回る死傷者があったことはほぼ間違いないと思われる。

日清戦勝利の美酒もつかの間、列強の三国干渉に酔いも醒まされ臥薪嘗胆を合言葉に対露戦の備えがされる。国民生活へのしわ寄せ、朝鮮への強圧的姿勢が加速される。一部国民の反戦論も天皇臣民下言論の自由は論外。ジャーナリズムを含め官民挙げて対露開戦論の唱和があり、戦争見通しは陸戦五分、海戦六分四分の厳しい条件のもと火蓋がきられる。旅順攻略を含め陸戦は満州を主戦場に激戦があり、露軍の作戦ミス等もあって日本は白兵戦をもって辛勝。それも海戦における露バルチック艦隊壊滅による劇的勝利により決定をみた。この海戦勝利により講和への道が開かれる。結果、日本に朝鮮植民地化、南樺太領有、満州進出をもたらした。戦死・戦病死者は日八万四千余名、露五万名。負傷者は日十四万三千名、露二二万名。陸軍の白兵戦思想は日中・日米戦争まで継続され禍根を残した。

（文責）大森　東亜

■第五回・読書会

「満州事変から日中戦争へ」（加藤陽子著）、十月二十一日開催、出席者二十名。リポーターは藤原宣夫氏。

日露戦争勝利で世界列強の仲間入りがかない傲慢になった日本が、米英など列強を相手に太平洋戦争に突入し敗北を喫した原因をこの本は検証している。あの大戦でのポイント・オブ・ノーリターンは張作霖爆殺事件と見て、今年六月に藤原氏は事件勃発八十周年シンポジュームに参画された経験や広島の小学校同級生が家屋倒壊修復作業中に全員が原爆の犠牲になった歴史に胸を痛め、核兵器廃絶運動に参加されている事も紹介された。

戦争末期に軍部の目をくぐって、スイスで藤村大佐らの和平工作、岩畔豪雄陸軍大佐と二人のアメリカ人神父の戦争回避の模索等の努力もむなしく敗戦に至った。日露戦争後、鉄道王ハリマンの満鉄買収提案への小村全権の反対が、満州中立・門戸開放への米国の極東政策につながって、太平洋戦争に至った側面にも言及。日本は一九二九年の大恐慌の後で、生きる事に大変な時期で満州は国民に魅力があり、ラジオや新聞が皇軍に特配員を派遣し、派手なメディア展開を行い、戦争を煽ったことも見逃せない。

藤原氏の軽妙・博学の話しぶりで大いに参加者の多彩な議論が展開された。

（文責）小野　博正

関西支部報告

連絡　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第四十五回

十月十八日開催、出席者は八名。

第二巻の初めの二十一頁から。使節団一行は、いよいよ世界に覇となえる大英帝国に足を踏み入れる。

人口、国土の広さ、位置、姿から「此の那の人は毎に日本を東洋の英国と謂う」が、経済力の隔たりはあまりにも大きいと使節団は認識を新たにする。我が国にも大陸からの距離的な関係が似ていることなどから何となく親近感や国民の類似性を感じる人も多く、使節団にもそうした気持ちもあったのではないかと考えられる。英国編に入るまえに、我が国と比較する視点も入れた、英国の歴史を概略的にみるレジュメ（「英国とは、英国人とは何か」）により、共通の認識を持つことにした。

英国の中世までの歴史を概観しても、アングロ・サクソン以外の要素がいかに多く混合し織り込まれているかという事実、コモンローの世界の必然性があったかが認識できる。

（文責）難波　康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を端緒にして歴史を学び現代の諸問題についても語りあい日本をよくしていこうという会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒112-0006 東京都文京区小日向 2-26-3
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101　FAX:043-238-6690

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ　等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2008年12月～2009年1月の予定です

☆新年懇親例会

日　時：１月16日（金）18:30開宴（18：00開場）
テーマ：スウェーデン
＊岩倉使節団が訪問した12カ国の一つです。
（『実記』第４編、第68・69巻）
場　所：レストランアラスカ
（内幸町　日本プレスセンタービル　10Ｆ）
会　費：8,000円
＊メゾソプラノ歌手およびピアニスト（ステーンハンマル友の会）による演奏やスウェーデン大使館のシェフによる料理もお楽しみいただける予定です。
＊友人、知人をお誘いください。

☆実記を読む会

日　時：12月11日（木）　18:30～21:00
日　時：　1月　8日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館
会　費：1,000円

☆英訳実記を読む会

日　時：12月18日（木）　18:30～21:00
1月15日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館
会　費：1,000円

☆歴史部会／近現代シリーズを読む会・第7回

日　時：12月15日（月）　18:00～21:00
テーマ：『大正デモクラシー』（成田龍一）
報告者：桑名正行氏
場　所：国際文化会館
会　費：1,000円

☆関西支部

「DVD・岩倉使節団の米欧回覧を観て話す会」
日　時：第２回 1月24日（土）　13:30～16:30
＊英国編・フランス編
第３回 3月 7日（土）　13:30～16:30
＊欧州編・帰国編
解　説：泉三郎氏
場　所：大阪弥生会館

編集後記

◇セクレタリーの小松さんからメールによる催し案内などの送信が行われるようになりました。この度、事務局専用のパソコン購入を機に、アドレス登録を整備し、メールを会員の有力な連絡手段の一つとしていきたいと考えています。現在、約百十名の登録者数が増加すれば通信費削減にも寄与できますし、来年度に計画されているメールマガジンやホームページ・リニューアルなど新しいメディアの活用も大いに期待できます。

メール利用などについての簡単なアンケートによって全体像を把握した上で、漏れのないきめ細かい通信網を再整備していく必要があります。会員のパソコン利用はかなり進んでいるものと思われますが、当会を場とした更なる活用とアドレス登録をお願いいたします。

◇泉三郎氏の「地球ぶらり独り旅―しくじりも、また楽し」（清流出版）が刊行されました。旧著「異文化遊歩」を加筆・修正したもので、書下ろしも追加され、著者が異国で経験した旅の裏話、失敗談が満載です。『実記』とは一味違った現代の旅の面白さを気軽に楽しむことができます。（N）